

紹介

平成 26 年 9 月 27 日付の西日本新聞インタビュー特集記事
医師と獣医師の連携構築「ワンヘルス」の理念の共有を

平成 25 年 11 月 20 日、藏内勇夫日本獣医師会会長と横倉義武日本医師会会長によって、両会の学術協力の推進に関する協定書が調印されてから約 1 年を迎えた中で、人と動物の共通感染症に対する対応をはじめ、今後の取り組みについて両会長のインタビュー記事がありますので、ここに紹介します。

特 集

西日本新聞 九州版 平成 26 年 9 月 27 日

医師と獣医師の連携構築「ワンヘルス」の理念共有
～日本医師会・日本獣医師会 両会長に聞く～

畜産業界を直撃する鳥インフルエンザや口蹄疫、動物から人への感染が発端とされるエボラ出血熱など、人と動物の関わりが多様化、複雑化したことに伴い発生する災厄、病気への関心が高まっている。人と動物の共通感染症への対応が共に求められる日本医師会会長の横倉義武氏と日本獣医師会会長の藏内勇夫氏は、ともに福岡県出身。両会長に、医師と獣医師が連携・協力を強める意義などを聞いた。

日本医師会の歩み

- 1947年 日本医師会設立
- 11月 認可
- 48年 日本医師会と日本医学学会統合
- 3月
- 51年 「医師の倫理」策定
- 9月
- 75年 世界医師会東京総会開催。武見太郎会長が世界医師会会長に就任
- 10月
- 88年 生命倫理懇談会が「脳死は人の死」とする最終報告を取りまとめ
- 1月
- 90年 日本医師会館が移転
- 2月
- 95年 阪神大震災で救援活動
- 1月
- 97年 設立 50 周年記念式典
- 11月
- 2000年 「医の倫理綱領」策定（「医師の倫理」全面改定）
- 4月
- 10月 坪井栄孝会長が世界医師会会長に就任
- 03年 治験促進センター発足
- 8月
- 04年 世界医師会東京総会開催
- 10月
- 07年 女性医師バンク開設
- 1月
- 11年 東日本大震災で救援活動
- 3月
- 13年 公益社団法人へ移行
- 4月



横倉 義武
(公社)日本医師会会長

よこくら よしたけ
1969年3月、久留米大学医学部卒業。同年4月、同大学医学部第2外科助手。80年、同医学部講師。90年、医療法人弘恵会ヨコクラ病院院長。97年、同理事長を兼任。2002年、福岡県医師会副会長。06年、同医師会会長。10年、日本医師会副会長。12年4月、同会会長に就任。



藏内 勇夫
(公社)日本獣医師会会長

くらうち いさお
1953年福岡県生まれ。79年3月に日本大学農獣医学部獣医学科を卒業。同年4月から臨床獣医師（小動物）となる。87年から福岡県議会議員。93年から福岡県獣医師会会長を務める。96年、日本獣医師会理事。2001年、第54代福岡県議会議員。05年、日本獣医師会副会長。13年6月に同会会長就任。

日本獣医師会の歩み

- 1948年 社団法人日本獣医師会創立
- 8月
- 50年 獣医師倫理綱領を採択
- 3月
- 51年 会名を「社団法人日本獣医師会」に改称
- 2月
- 72年 沖縄県獣医師会が日本獣医師会の正会員に
- 3月
- 85年 獣医師制度 110周年記念式典
- 11月
- 95年 世界獣医学大会（横浜）開催
- 9月
- 97年 公衆衛生委員会が「人畜共通感染症対策における獣医師の役割について」の答申書
- 11月
- 99年 「インフォームド・コンセント徹底宣言」を発表
- 9月
- 2001年 牛海綿状脳症（BSE）緊急対策会議開催
- 10月
- 12月 家畜伝染病予防法施行 50周年記念式典
- 04年 メールマガジン（略称「メルマ日獣」）発刊
- 5月
- 07年 「緊急災害時における動物救護ガイドラインの策定」について報道発表
- 8月

国民の期待に応えるために

■活動範囲広い獣医師

— 獣医師の典型的なイメージは「動物病院の先生」ですが、その他に社会のどんな現場で活躍されていますか。

蔵内 ペットや家畜の病気を診る動物診療が分かりやすいですが、獣医師の活動範囲はかなり幅広いです。人の食の安全管理、人と動物に共通する感染症の予防、希少動物の保護、バイオメディカル分野などさまざまです。どれも安全・安心な社会づくりを担っていると自負しています。

— 現在、獣医師を取り巻く課題にはどんなことがありますか。

蔵内 喫緊の課題としては、獣医療を提供する体制の整備です。家畜を診る産業動物診療獣医師や、食肉衛生検査所や家畜保健衛生所などで働く公務員獣医師が不足していますが、その原因は地域や職域による偏りです。処遇改善と地位向上を目指し、全国の都道府県議会などに精力的に働きかけています。

また、獣医師の資質向上や職業倫理の醸成が求められており、生涯学習研修事業のさらなる強化に取り組んでいます。次世代の獣医師育成体制の整備に関しては、国際化が進む社会で通用するように、国際水準を満たす教育が重要です。獣医師系大学16校に、カリキュラムや臨床教育の充実など具体的な要請を行っています。

— 畜産王国・九州では近年、口蹄疫や鳥インフルエンザの発生によって、生産農家が大打撃を受けました。牛海綿状脳症（BSE）の乳牛、肉用牛が九州でも確認され衝撃が走ったのは、記憶に新しいところです。

蔵内 実に残念なことです。国家レベルの防疫、地域での防疫が不十分だったことは否定できません。進展するグローバル化に備え、一層の危機管理に努めねばなりません。国民が安心・安全に生活できるよう、国際獣疫事務局（OIE）や国連食糧農業機関（FAO）、世界保健機関（WHO）などの国際機関、世界各国と連携して情報の共有化を図り、国内の予防対策に反映させる必要があります。

■過不足のない医療提供

— 横倉会長、地域医療の再構築は日本の医療の大きな課題です。中でも医師の診療科による偏在とともに、地域間の医師の偏在がクローズアップされています。これにどう対処するお考えですか。

横倉 医師数の地域による偏りを生んだ大きな要因は、2004年に始まった新医師臨床研修制度です。医療機関



宮崎県で発生した口蹄疫で、牛を目視検査する獣医師＝2010年7月、宮崎県都城市

で2年間の研修が義務付けられたことで、幅広い診療能力が身に付きプライマリーケアにつながる点は素晴らしい。けれども、研修する医療機関にエリア的な縛り、例えば「九州の医学部を出た人は九州の医療機関で研修を」といった決まりがないため、東京、大阪をはじめ都市部に医師が集中してしまった。そのことによって研修終了後も、医師は都市部に残り、地方は慢性的な医師不足という構図に陥っているのです。福岡県内でも福岡市内は医師の供給が過剰なのに、同市から車で1時間も走った地域は医師不足ですよ。

私たちは、医師の養成や働く場所の確保といった問題を、行政、大学、地域の医師会などで話し合っ解決する「医療対策協議会」を都道府県単位でつくり、医師の偏在解消に努めていくことを提言しています。

— 高齢化も大テーマですが、医師会としてどう捉えていますか。

横倉 「国民が必要とする医療を過不足なく受けられる社会づくり」が日本医師会の使命です。このことは住み慣れた町で自分らしく暮らせる地域づくりを進めようと、政府が打ち出した「地域包括ケアシステム」と相通じるものがあります。地域包括ケアで要となる「かかりつけ医」は、病気や健康だけでなく、介護の相談も求められます。私たちは、医療・福祉の一体化に応えられるかかりつけ医の養成に取り組んでいます。

世界最高の平均寿命を誇るわが国ですが、日常生活に支障がなく自立した暮らしを送れる「健康寿命」を延ばすことが大きな課題です。私たちが提唱している「生涯保健事業」が、それに有効だと考えます。若いときから①生活習慣の改善②健康診断結果の活用③病気の悪化、再発の予防—を包括し、健康の維持・増進を図ろうというものです。

— 「患者申し出療養（仮称）」、いわゆる混合診療の問題について考えをお聞かせください。

横倉 「患者申し出療養」については、政府に対して医療の安全性と有効性を必ず担保するように主張してきました。政府が6月に発表したこの新たな仕組みは、困難な病気と闘う患者さんの申し出に基づき、国内未承認の医薬品

使用などを保険外併用療養として認めるというものですが、安全性と有効性は最低限担保され、将来は公的医療保険の適用を目指すということでしたので、了解しました。

具体的な仕組みについては今後、国の審議会で議論されることとなりますが、引き続きその行方を注視していきたいと思っています。

人獣共通感染症の脅威増す

■人と動物の健康が一体化

—国内で飼育されているペットは犬と猫だけで2千万匹を超えているそうですが、動物が人の健康に与える影響をどう見えていますか。

藏内 身近になった動物の数が増加しただけでなく、盲導犬や介助犬が象徴するように、人と動物の関わり方が親密化しているのも近年の傾向です。さらに、家畜や野生動物の生息圏と人の生活圏との重なりが広がる中で、人と動物の共通感染症が発生する可能性は数段高まっているといえます。人の健康と動物の健康はもはや線引きできない、一体化しているといってもよいでしょう。

—エボラ出血熱や国内のデング熱の感染拡大のニュースを見ると、人類は昔から天然痘、ペストなど感染症のパンデミック（世界的流行）との闘いを繰り返してきた、と思いがたります。医療人の立場から今の状況をどのように見えていますか。

横倉 ペニシリンをはじめとする抗生物質の発見、普及によって、人間は感染症を克服できたと思った時期があったのは事実です。しかしそれは間違いでした。ウイルスが、思い上がった人間に対して警告を発しているようにも映ります。

■エボラまん延の可能性

—新たな感染症拡大の陰に、いつも動物が絡んでいるように思うのは気のせいでしょうか。

横倉 エイズもエボラ出血熱も、動物間の感染の際、あるいはサルやコウモリから人へうつる過程で、ウイルス変異など通常考えられないことが起こります。エイズがまん延したのは、致死率が短期的に見れば高くなかったためです。逆に、エボラ出血熱のようにこれまで大きな広がりを見せてこなかった感染症は、致死率が非常に高かったという側面があります。感染者が場所を移動する前に死亡し、感染地域が広がらなかったのです。新型インフルエンザも同じです。エボラウイルスは弱毒化してきています。感染者がすぐに死なない、つまり潜伏期間が長くなれば、この感染症が想像を超えてまん延する可能性もあります。

—動物と人の接点が広がれば、今後も致命的な感染症が新たに発生する可能性があるからとはいえ、人間社会から動物を遠ざけるのは難しい気がします。

藏内 私はこれまで「全ての動物に尊厳を」を信念として日本獣医師会、日本動物保護管理協会の活動に関わってきました。飼育動物、野生動物を愛護することと、人間社会の中で動物を適切に管理していくことは、区別しなければなりません。人と動物の共生を前提に、いま何をしなければいけないか考えています。

治療や技術面で情報を共有

■「川上」と「川下」の関係

—世界中の人や物が行き交う日本は、感染症の脅威にさらされている国でもあります。国内の感染症の防衛態勢はどうなっていますか。

横倉 エボラ出血熱を例に挙げれば、アフリカで感染が拡大したとき、感染国には国際協力機構の日本人スタッフが二十数人滞在していました。万一発症すれば帰国させます。検査や治療をどの医療機関で行うかなど、一連の対応について既に政府と関係機関とで取り決めました。備えはできています。

—共通感染症の予防において、ウイルスを媒介し発生源となる「川上」の動物を扱う獣医師には、どんな役割があると考えますか。

藏内 感染の「川下」である人間の健康をきちんと見据えて、動物医療を提供することが何より重要です。例えば、家畜診療では特に食の安全を考慮した対応が、ペット診療では人獣共通感染症や薬剤耐性菌問題などを考えて細心の注意を払うことが重要です。また、野生動物に接触する際、共通感染症のリスクを意識した対応が求められます。

—「川下」の人間を治療する医療者側に、獣医学の知識や獣医師との協力が必要になっているのではないのでしょうか。

横倉 私たちは医学と獣医学を異なる分野とは認識していません。人、動物それぞれの病気を治す、健康を維持するという大きな枠組みの中で、医師会と獣医師会が連携し、さまざまな協力ができるはずで。

—藏内会長は獣医師と医師の連携・協力をどのように考えますか。

藏内 野生生物保護協会が04年に提唱した「ワンワールド・ワンヘルス（世界は一つ、健康は一つ）」という理念があります。これは、人や動物の健康、食料生産、



心臓手術に臨む医師たち。一つの命を救うために医師たちは全力を注いで病に立ち向かう
＝福岡市立こども病院・感染症センター

自然環境の保全は相互につながっていることを踏まえ、全ての関係機関などが密接に連携・協力することの重要性を含みます。日本獣医師会の活動方針は「動物と人の健康は一つ。そして、それは地球の願い。」です。獣医師が医師と連携・協力するのは必然です。

■学術協力の推進協定

——日本医師会と日本獣医師会は13年11月、学術協力の推進に関する協定を締結しました。締結の意義と、実践の中身についてお聞かせください。

横倉 人獣共通感染症の防止策や食の安全性確保に向け、最新の治療や技術について情報共有できる意義は大きいです。10月28日、東京都内で「狂犬病の現状と対策」をテーマに、両会主催の連携シンポジウムを開きます。また、全国に先駆けて福岡県医師会と福岡県獣医師会が学術協定を結びましたが、今後は他の都道府県レベルでも協力態勢が推進できるよう後押しします。

藏内 この協定締結は、世界獣医学協会（WVA）と世界医師会（WMA）が12年に締結した覚書を日本で実現したことになります。獣医療と医療の一体化を進めながら、国民に衛生教育を徹底しつつ、国家防疫システムを構築していくことが必要です。

地方や生活者の視点に立つ

■ともに九州出身のトップ

——日本医師会の前身・大日本医師会の初代会長は北里柴三郎氏（熊本）。日本医師会の会長としては、九州からは谷口弥三郎氏（同）に次いで横倉会長が2人目となります。

横倉 今年5月、北里さんの生家がある熊本県小国町を訪ね、あの山の中で生まれ育った人が日本の医療、医学をリードしたのかと思いをはせました。私は旧福岡県高田村（現みやま市）の農村地帯の出身です。戦後、医療を受けたくても受けられない地域の人たちを目の当たりにしてきましたので、国民皆保険の維持には強い思いを持っています。

——藏内会長は歴代の日本獣医師会会長で初の九州出身だそうですね。

藏内 福岡県議を務め現在7期目ですが、宮崎県で口蹄疫が発生した際には、九州一円の防疫体制の必要性を県議会で訴え、全国議長会に提案しました。九州への思いは強いです。また、「九州・沖縄に獣医学部を」が私の念願です。国内の獣医師系大学の一部は獣医学科ですが、全てが「獣医学部」になれば教育体制の充実が期待できるからです。

——政治家、獣医師の両方の立場で培われた信念、姿勢は何ですか。

藏内 いかなる場合も国家と国民、県政と県民の願いを第一に、いかなる課題も勇気とスピード感をもって、熟慮断行し的確に解決する、ということです。

——会長の任務として、医療政策の転換など時に政治的課題で政府と向き合う場面もあると思います。その場合、何を軸にして判断していますか。

横倉 「生活者の立場に立つ」ことです。私は日本医師会の役員に、政策の是非を考える際、二つの判断基準に照らして熟慮するよう伝えています。一つは国民に安全な医療を提供することに資するか。もう一つは公的医療保険による国民皆保険の維持につながるか。その根底にある目的は、国民が必要な医療を過不足なく受けられることです。

■地方の声すくい上げ

——最後に、地方組織の声をどう取り上げていくかを含め、全国組織のトップとして会をけん引する決意と抱負をお願いします。

藏内 日本獣医師会副会長を8年間務めた後の会長就任なので、全国の獣医師会が抱える課題は十分理解しているつもりです。全国の獣医師が各職域で誇りを持ち、安全で安心な社会を構築するという職務を遂行できるように、会員と構成獣医師のために全力で取り組む決意です。

横倉 各都道府県医師会の会長たちとは2カ月に1回、一堂に会していろいろなテーマで議論をさせてもらっています。また、私は毎週末に地方へ出掛け、その医師会から率直な意見を聞かせてもらっています。やはり一番多い声は地方の医師不足です。そうした地方の声をすくい上げながら、できる限り日医の政策に反映させていきます。引き続き「国民と共に歩む専門家集団」を目指します。

——藏内会長、横倉会長の地元福岡では、それぞれの活躍を祈るとともに、旧知の間柄であるお二人の協力が進み、素晴らしい成果が実ることへの期待もあります。ありがとうございました。